

## ヨーロッパ宗教学会(EASR)第 20 回ヴィリニウス大会参加報告記

2023 年の 9 月 4 日から 8 日にかけて、リトアニアの首都ヴィリニウスでヨーロッパ宗教学会(European Association for the Study of Religions: EASR)の第 20 回年次学術大会が開催された。報告者自身は 9 月 8 日から東京で開催される日本宗教学会の学術大会にも参加予定であったため、途中ではあるが大会 3 日目で滞在を切り上げて帰国の途に就かざるをえなかった。したがって本報告は全日程のうちあくまで前半部のみの描写にとどまる。

ヨーロッパ宗教学会は国際宗教学宗教史学会(International Association for the History of Religions: IAHR)の加盟学会の 1 つとして 2001 年に設立された比較的新しい欧州地域規模の学会組織である。IAHR の世界大会が開催された 2010 年と 2015 年を除き、欧州各国の都市で持ち回りをして毎年年次大会を開催している。

日本宗教学会と大きく異なるのは、個人研究発表の応募形式である。EASR では大会全体のテーマトピックが設定されており(例えば今大会のテーマは「諸宗教とテクノロジー Religions and Technologies」であった)、そのテーマトピックに基づいてクローズドパネル Closed Panels やオープンパネル Open Panels が企画され、また各パネルごとの小テーマも設定される。とはいえ実際には「場所づくり Placemaking」のように、大会全体のテーマと直結しない題目のパネルも含まれているようである。個人発表予定者は発表タイトルと要旨を提出する際に、自身の発表内容に近いオープンパネルに直接応募するか、それとも日本宗教学会のようにひとまず独自パネル Sui Generis Panel の枠組みで応募し、受諾された後に主催者側の方で各オープンパネルに振り分けてもらうかのどちらかを選択することができる。特定パネルに応募が殺到して競合状態になるのを回避したい場合であったり、もしくはどのパネルが自分に合っているのか見当がつかない場合には後者の方式でとりあえず応募してみるのが戦略として有効だろう。

大会は、旧ソ連時代の高層モダニスト建築物を改装したホテル内の会議センターで行われた。会議センター中央部のロビーには軽食と飲み物が用意されており、1 時間半から 2 時間半ほどのパネルセッションの間には必ず 30 分程度のコーヒブレイクが挟まれていた。またロビーには大会を後援している学術出版社のブースも見受けられた。De Gruyter や Brill、Equinox、Bloomsbury 等、これまで通販経由でしか書籍を購入したことのない海外出版社が店頭販売も兼ねたブースを開いている光景に、ある種感動の念すら覚えた。特に Brill 社ブースの新刊本の大半は報告者の専門領域である欧州のイスラームに関する書籍で、展示本は割引価格で販売されていたということもあり、帰りの荷物が重くなることは承知の上で何冊か購入した。

初日に举行された開会式では、大会のテーマにふさわしく AI が式冒頭の第一スピーカーを担っていた。その後 EASR の現会長で在英ヒンドゥー教徒のフィールドワークや宗教空間論で著名なキム・ノット Kim Knott 氏が挨拶を行った。本来今年の大会はウクライナのキエフで開催される予定だったが、ロシアによるウクライナ侵攻によって大会実施が困難となってしまった。その後リトアニアの宗教学会が代替の開催地として名乗りを上げたおかげで、短期間で軌道修正に成功し今大会開催にこぎつけたという

経緯である。EASR 執行部はウクライナでの開催も依然としてあきらめてはいない様子で、情勢が好転すれば 2028 年にキエフに戻ってこられるかもしれないとの展望を述べていた。

基調講演は毎日 1 回正午の時間に開催され計 5 回行われたのだが、報告者が立ち会ったのはそのうち 3 回のみである。初日はイギリス・ランカスター大学の社会学教授ブロンスワフ・シェルシンスキー Bronislaw Szerszynski 氏、2 日目はスウェーデン・ウプサラ大学の考古学卓越教授ニール・プライス Neil Price 氏、そして 3 日目はフィンランド・ヘルシンキ大学の文化学教授クセニヤ・ツァイラー Xenia Zeiler 氏が登壇した。

シェルシンスキー氏は人類と科学技術とりわけ機械との関係史を、実在の神話的要素を組み合わせた語りの形式で叙述し、人間の意志を体現するために生み出された機械が最終的には地球を去るという多様な解釈が可能な結末で締めくくった。プライス氏は、人々がキリスト教に改宗する以前のヴァイキング時代のスカンディナヴィアにおける墓碑に注目し、記憶を永続化する物質的技術としての墓碑がキリスト教の宣教にともなっどどのように変容したかについて解説した。ツァイラー氏は南アジア地域を専門としており、世界中に拡散しているヒンドゥー教徒ディアスポラコミュニティがソーシャルメディアをいかに活用してアイデンティティの再構築・強化を行っているかを前半部で説明した。後半部ではテレビゲームに焦点を移し、従来資本主義による文化の消費化の側面にばかり指摘されていたテレビゲームが教育用に開発されたソフトウェアの登場により宗教的な自己を涵養する機能も果たすようになりつつあるという興味深い現状について報告していた。

いずれの基調講演においても宗教と（科学）技術の関係がテーマの基底に置かれており、これらは近代的な主体/客体や人間/非人間の認識論的区別の問い直しを目的とした 90 年代以降のポストモダン思想や近年の関係主義的な理論の隆盛が反映されたものであった。報告者個人としては、EASR は従来の実証主義を重んじる研究者が多く近年のこのような動向にはむしろ冷ややかなのではないかという先入観があったので、シェルシンスキー氏が提示する脱人間中心主義的な関係史が年次大会冒頭の基調講演に位置付けられている点には心底驚かされた。

報告者自身は 2 日目午前のパネルで個人発表を行った。発表は教会からモスクへの転用に関する修士論文の一部内容を抜粋する形となり、時間としては約 20 分程度であった。ドイツ現地調査や日本宗教学会での発表と並行しての資料作成であったため、時間配分の調整や読み上げ用の原稿まで十分に準備を整えることができなかつたのが悔やまれる。身振り手振りを交えての発表形式は後からきく限り参加者には好評ではあったらしいが、母語ではない英語での発表のためやや時間を超過してしまった。日本の学会では、事前に原稿を準備して本番では目線を原稿に落として読み上げる形式が多く見受けられる。本学会の大会でもそのような形式をとる研究者が皆無という訳ではなかつたが、それでも原稿の内容は暗記した上で本番では身振り手振りを交えて（TED のプレゼンのように）話す方が聴講している他研究者からの反応は良さように思われた。報告者と同一のパネルで発表したコーネル大学の人類学博士院生でユダヤ研究者のジェイミー・ルリア Jaimie N Luria 氏とチューリヒ大学の宗教学者マティアス・ブランド Mattias Brand 氏は後者の方式を採用しており、特にブランド氏の発表はまさに模範に

したい程の完成度の高さであった。とはいえ非英語母語話者でかつまだ院生である報告者の場合には、冒険をせずに素直に英語の原稿を用意して読み上げた方が賢明かもしれない。

今大会に参加してとりわけ印象に残ったのは、ヨーロッパ宗教学会の政治性並びに他研究者との交流であった。ロシアの侵攻によりウクライナでの開催を断念せざるを得ない中で、代替開催地としてリトアニアが名乗りを上げた経緯は上記で説明した。リトアニアはウクライナ同様旧ソ連の構成国（リトアニア国民の視点からすれば占領下に置かれていたといえる）であったが 1991 年に独立し、現在ではウクライナに先駆けて EU に加盟しかつ通貨ユーロ導入やシェンゲン圏入りも済ませ欧州の一員としての自己意識を強めつつある。したがってリトアニアという国での開催自体が、昨年からのロシア侵攻に対するウクライナ支持・ウクライナの欧米陣営への取り込みというある種の政治的な見解表明として作用しているといえよう。その側面が顕著にあらわれたのが初日の夜に開かれた歓迎会である。歓迎会は旧市街中心部に立地するヴィリニユス市公会堂を貸し切って行われたのだが、市公会堂のファサードには連帯を示すためのウクライナの国旗が掲げられていた。また歓迎会の最中にもウクライナ宗教学会の会員が登壇し、今もなお戦地にいるウクライナ軍兵士への感謝の意、そして将来におけるウクライナでの大会開催の展望を述べた後に乾杯の音頭がとられた。あくまで外部者に過ぎない報告者の視点からすると、ベラルーシやロシアに隣接した EU 加盟国のリトアニアの地においてウクライナの研究者を囲み参加者全員で乾杯を行うというこれらの行為は、欧州各国の団結を再確認・強化した上で、かつ脱ロシア化を進めるウクライナを歓迎する内輪的な儀礼のように映った。しかしながら一方で、配偶者がロシア人であったりロシアを研究対象地域としている事情からロシアとの関係を完全に絶つことが難しいという研究者もあり、大会の全体の雰囲気とは裏腹に個人の次元では複雑な現実が窺えた。

交流に関しては欧州イスラームの研究者よりも（当該領域の研究者が集中していると思わしきイスラモフォビアに関するパネルセッションは、報告者がリトアニアを去った後の 4 日目に開催された）、むしろ報告者とは異なる関心・専門領域を持つ研究者の方との接触・会話が意義深いものとなった。とりわけラトビアのペイガニズム（現在は「民族宗教」という呼称の方が望ましいとされているらしい）と日本神道の比較研究を行っているウギス・ナステビッチ Uģis Nastevičs 氏とは話がはずみ、日本国内ではなかなか窺い知ることのできないラトビアの宗教学やペイガニズム事情に関する情報を得ることができた。また同パネルで発表を行ったルリア氏やブランド氏とは発表当日の夜に食事を共にし、研究並びに欧州アカデミアでのキャリアパスの苦労を語り合うのみならず、報告者自身のキャリアについても親身に相談にのって頂いた。

大会全体を通して再確認したのは、日本に限らず海外においても研究という営みは個々の生身の人が担っているという事実である。海外の研究文献の場合、日本語文献以上に著者の存在が意識の上で背景に退いてしまいがちである。文献で名前だけを知っている方々や出版社と直接交流することにより、これまで以上に研究のモチベーションが高まったように感じている。それと同時に現実の政治動向に翻弄される個人研究者の姿や、その中で一アクターとして振る舞う学会組織の姿も目の当たりにし、アカデミアにおける政治性についてあらためて考えさせられた。このような貴重な経験を積む機会を

紹介して下さいった藤原先生には心より感謝申し上げたい。今回の経験を足がかりとして、今後も様々な国際学会に積極的に参加していく所存である。

文責: 和田 知之

